

社会教育における家庭教育支援のあり方について

—ある母親の経験を手がかりに—

萩原建次郎（駒澤大学）

1. 家庭教育・子育ての現状と課題—国の調査から（前回配布資料3⑤参照）

- 約4割の保護者が子育てに悩みや不安を抱えている。
- 地域のなかでの子どもを通じた付き合いが減少している。
- 孤立化による児童虐待のリスク。
- 三世帯世帯の減少、ひとり親世帯の増加。



- 約9割の人が子育てする人にとっての地域の支えが重要だと思っている。
- 多くの人が子育てに関する相談や情報提供をする人や場、交流の場が重要だと思っている。

2. 子育て当事者の目線に合わせた支援のあり方を考える

以下の事例は、東京の下町で育ち、結婚を機に地元から離れて子育てをするようになった女性（Aさん）が不登校経験の若者たちを交えたセミナーに参加した後、彼らの想いに触発されて語ったものである。そこには結婚・出産から孤独な子育ての日々をどのような思いや感情のなかで生きてきたかがありありと語られている。今回はこの事例を手がかりとして、できるだけ子育て当事者の経験世界に目線を合わせ、事例から子育てをめぐる課題とその構造を読み取り、「家庭教育支援のあり方を考える上で必要な視点は何か」を考えたい。なお、事例の使用にあたっては、Aさん本人からの承諾をいただいている。

（1）Aさんの簡単なプロフィール

中学生の頃から地元のジュニアリーダー活動に参加。大学生になるとリーダーとして、地元の子どもたち（小中高校生）のキャンプ活動支援やレクリエーション活動、さまざまな地域活動への参加などを活発に行なってきた。地元地域でも顔なじみの大人も多く、地域で育ち、地域の若者リーダーとして活躍してきた人物。大学では健康科学を学び、スポーツも得意。そうした経験を活かし、地元の役所で社会教育指導員としてしばらく働いていた経験もある。

(2) Aさんの経験

結婚してからは、とても大切にしてきた地域活動、仕事、つながりの全てを置き去りにして地元を離れ、私は引きこもりました。自分で選択したはずの結婚自体に、疑問すら抱える日々でした。仕事もなく、子どももなく、働けるのに働いていないこと、稼いでいないのに消費ばかりしていること、生きているだけで家庭や社会にマイナスの効果しか生んでいない、そう思いながら寝起きする日々でした。挙式中に「しっかりやりなさいね。」と最後の厳しさを与えてくれた母の言葉がいつも、頭の中をぐるぐるとしていました。

仕事を持たない、稼ぎがない、ということがいつもついて回り、気分転換に外へ出ても、「昼間からぶらぶらしている若者」＝「ダメな大人」と見られている気がして、電車に乗っても「稼いでいないのにお金ばかり使っている」申し訳なさで外出しなくなり、家にいても、クーラーをつけられない、部屋の電気もつけられない、トイレを流すのもどうだろう、と光熱費(お金)のことばかり考え、気が休まらなかったのです。

仕事を持たないまま、妊娠が分かり出産しました。怒涛の子育てが始まりました。子どもとの時間は温かく、微笑みと幸せが溢れ、「お母さんになりたい」という自分の夢が叶うときが訪れる、そう思っていました。でも、現実とは全く違っていました。子育ては毎日が不安で、はじめての連続で、正解を求めても「子育てに正解なんてないから、大丈夫」と全然安心できないお決まりのフレーズしか返ってこない、ただただ睡眠不足と疲労だけが蓄積されていきました。

自宅に子どもと2人きりの時間が長く続きました。出かける先はスーパーだけ。誰とも話さない、子育て以外のことに何も頭を使わない、使う暇もない、そんな時間が長く続きました。社会活動の全てから隔離されているような、このまちの誰も私たちの存在を知らないような、居ても居なくても良い存在になってしまったような気持ちになりました。

人とつながり合うことの良さ、楽しさは、おかげさまでよく分かっていたので、なんとかそういう場を見つけてつながることができました。子育て支援館の仲間ができてからは、本当に新天地での生活が楽しくなりました。スーパーでも公園でも、私たち親子を知る誰かに会える、挨拶する人がいる、それだけで幸せでした。

支援館に居る間は「優しいお母さん」、「お母さんは我が子が大好き」、「お母さんはいつも家事をちゃんとやっている」というあるべき姿から解放され、「我が子ムカつく！」談義に花を咲かせたり、「今夜のおかずはお総菜だけにするから、もうちょっとここに居ちゃおう」と高らかに宣言してみたりして、とてもリラックスして過ごすことができました。(「子育てリラックス館」という名称がしっくりきていました。)

子育ては孤独です。そして、「正解がない」ので自分のしていることを肯定しにくく、「加点！」と思えることはないのに「減点…」と思える失敗は続き、母としての自信なんてものは一向に育たないのです。それに、子どもが生まれた瞬間から「自分」は不在で「〇〇ちゃんママ」として我が子の世話をし、我が子のタイミングで寝起きをして、自分の好きなことに没頭できる、集中できる時間はなく、自分を生きることが困難になります。

(3) 事例から見てくる子育て当事者の生きづらさの内実

○自分を生きるのが困難ー孤立した子育てが生み出す当事者自身の存在不安

《このまちの誰も私たちの存在を知らないような、居ても居なくても良い存在になってしまったような気持ち》

《子どもが生まれた瞬間から「自分」は不在で「〇〇ちゃんママ」として我が子の世話をし、我が子のタイミングで寝起きをして、自分の好きなことに没頭できる、集中できる時間はなく、自分を生きることが困難》

○「あるべき家庭人・あるべき母親(=世間のまなざし)」と「ダメな自分」とのせめぎあい

《仕事もなく、子どももなく、働けるのに働いていないこと、稼いでいないのに消費ばかりしていること、生きているだけで家庭や社会にマイナスの効果しか生んでいない・・・》

《「稼いでいないのにお金ばかり使っている」申し訳なさ・・・》

《「昼間からぶらぶらしている若者」＝「ダメな大人」と見られている気がして・・・部屋の電気もつけられない、トイレを流すのもどうだろう、と光熱費(お金)のことばかり考え、気が休まらなかった・・・》

《「優しいお母さん」、「お母さんは我が子が大好き」、「お母さんはいつも家事をちゃんとやっている」というあるべき姿・・・》

○「正解のない子育て」「減点はあるけど加点のない子育て」ー母親としての自信が育たない

《子育ては毎日が不安で、はじめての連続で、正解を求めても「子育てに正解なんてないから、大丈夫」と全然安心できないお決まりのフレーズしか返ってこない》

《「正解がない」ので自分のしていることを肯定しにくく、「加点!」と思えることはないのに「減点…」と思える失敗は続き、母としての自信なんてものは一向に育たない》

○身近な生活圏で相談できる人、心許せる仲間を見つけることの困難さ

《自宅に子どもと2人きりの時間が長く続きました。出かける先はスーパーだけ。誰とも話さない、子育て以外のことに何も頭を使わない、使う暇もない、そんな時間が長く続きました》

《ただただ睡眠不足と疲労だけが蓄積されていきました・・・》

《社会活動の全てから隔離されているような、このまちの誰も私たちの存在を知らないような、居ても居なくても良い存在になってしまったような気持ち》

(4) 孤独な子育てと生きづらさからの脱出を可能にさせた要因は何か

○何より A さん自身が小さい頃からのジュニアリーダー活動や地域活動を通して人とつながる楽しさや良さを知っていた。

《人とつながり合うことの良さ、楽しさは、おかげさまでよく分かっていたので、なんとかそういう場を見つけてつながることができました》

○「親としてダメな自分」も安心して出せ、共感し合える仲間を得た。

《「優しいお母さん」、「お母さんは我が子が大好き」、「お母さんはいつも家事をちゃんとやっている」というあるべき姿から解放され、「我が子ムカつく!」談義に花を咲かせたり、「今夜のおかずはお総菜だけにするから、もうちょっとここに居ちゃおう」と高らかに宣言してみたりして・・・》

○生活圏に顔の見える仲間ができたことで、地域に生きていることの実感を得ることができた。

《子育て支援館の仲間ができてからは、本当に新天地での生活が楽しくなりました。スーパーでも公園でも、私たち親子を知る誰かに会える、挨拶する人がいる、それだけで幸せでした。》

○自治体が孤立無援の子育て世代に対応した子育て支援施設を整備し、情報発信していた。

3. 社会教育における家庭教育支援のあり方について

－「子育て当事者の生きる意欲、解決する意欲を支え引き出す」家庭教育支援へ－

(1) 子育て当事者のエンパワーメントの視点（家庭教育支援チームを考えるにあたって）

○身近に子育て中の苦しさやしんどさなどに耳を傾け、聴いてくれる人を確保する。

⇒個別訪問型では保健訪問の保健師との協働も有効ではないか。

○仲間づくりの場や機会へとつないでくれる情報を子育て当事者に届ける。

⇒個別訪問型では子育てサークル・講座・施設情報のパンフレットなど、外につながる情報も直接渡す。

○子育て世帯（とくに産前産後期）に根気強く外から“招待”“歓待”メッセージを送る。

⇒出かける意欲や自信が低下している子育て当事者にとって、外からの「どうぞいらしてください」「ようこそ」というメッセージが必要。

○子育て世帯以外の他世帯にむけて子育て当事者への理解と共感の輪を広げる。

⇒子育て当事者の社会的な負い目やプレッシャーを軽減する。

⇒例えば「WE ラブ赤ちゃんプロジェクト」の普及とコラボレーション

(2) 社会教育における家庭教育事業・活動を展開する際に配慮すべき点

○青少年期から「人とつながることの楽しさ、良さ」の体験機会を豊富に提供する。

⇒将来の人や地域につながる力、かかわる力の基礎になる。

○子育て世帯の仲間づくりの場や機会を提供する際には、参加者同士が安心してかかわり、つながれる配慮が必要。

⇒集めておいて「あとは勝手につながってください」にはしない。

○自分を生きることが困難になりがちな子育て当事者にとって、子育て以外の楽しみも大切。

⇒社会教育施設における保育つき事業・講座の充実

○子育て世帯（とくに産前産後期）に根気強く外から“招待”“歓待”メッセージを送る。（再掲）

4. 今後の調査・検討に向けて残された課題

今回の事例は産前産後期の子育て家庭を中心としたもの。子どもが学齢期になったときの子育ての課題や家庭教育の課題は何であるのか。アンケート調査に加えて、さらなる子育て当事者の聴き取りや事例から丁寧に読み取っていく必要がある。